古今著聞集

十八 十九

太政官文庫
和書門
類 三二三三八
號
函
架
冊 一五

内閣文庫
和書
類 三二三三八
號
冊 一五
函 一
架 二

内閣文庫
番號 和 32338
冊數 15 (14)
函號 210 143

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

古今著聞集巻第十八

飲食

食者人之本也八政獨以食為首然中醸酒者起自素盞嗚尊元酬示之興何物若之三友之其一放遊之紹介也

中の宮白川殿の沙汰なりけるに酒車代肉よ酒饌をまうけられく宋虎大納言雅定人道反をどよびのせまりて沉醉の事共ありけり人々級をどもびえれくだり酒壺どのハおそれをもて招まひりく後ハやがて仕事せうなりとて

この月のさわりみとうりて日吉神慈をかうかと
ぞ侍ふ作りきる中実白はくさけ紙のこ作く
つのあとくさに拾系世界は横家なくそまれ
又世生をべうしぶとぞ作きる歌行ての
時を名ひく神のより行を家車れうちめて冠
おちめをり面ろくかくんれをのかれば
れどろれをひくあぎをうらくびんをなを行
くれだをのおとくめ発てんれるとぞ沈
客仮ようく国をるれのりてうくなれる
寛弘二年二月日条に藤原行幸を

ろう吉家の業成おこれりをのら法仏業げん
年ごをりを又重歌の奥をりをり国宴沙蓋
と吉ふ沙中納言儀賢は拾ふ府大蓋を
拾りりくをのごくかうあるうてのこて南
階とおりりく拾年みをり池蓋のさてれえぐを
れりくあ階とのぐりて独をひ家ぐりて鑒訳拾り
まりくくを上よをうを後人れぐぎをみをり
万寿二年四月二百実白のげ大宴へまのり拾く蓋
歌の年みをりりくく酔く後おりて皇大宴文へ
年ををりをるれ又酒をす発てを実面より

さくらぢ咲くくれ酔くゑの華ふかすびよ春の
春下出させ給ひるるに玉めたる文杉宗大納言結信
繊れとめくおろり出給ひ中納言乃方は車の
もぢれくぢ〜きりいみドかりきぬ〜小舟文
の紀ふんつり
道命阿闍梨所〜はりさきるにゆまうどの女房
ふりせあるりきる紙れれいあにものぞこ四れぢり
こ五ひ〜〜く作るそ海ひぢさんあれりをいふ
ゆくよみ作る
ひ〜〜〜るもぢたもねそ海ひぢた

ちつきぬづ〜さあちそもれ
あや〜ぎ形るげとおこの粹稚る俤ふ孔を
ひきりありきれぢ
文元屏風に巣のうゆ絵そ在さう
ひ〜ものつ〜たるんとふり
書芸の前大僧正又貞盲人ま中海さをぐり
きるに僧恵法師ゆくさちにいるぢさうや
つるりたとそよみを海
あや先とぢかりたりてもふ元屏
ちまたひくあるうちにいくそや

めづらしやとのゐのあるじとをがみ
ちまたひくものそこにこちぬる
知恵院殿中納言のとゝ紀豊後ふまし〳〵家中納言
宗甫小筆をかゝるせをとる時座の刻より申り
いとゝまで使すかりをとりその時盃饌をまうを
らまくさいくよをそらきをとり源中納言重信
いを時てんじゆうへすて喜るの清盃しをとり改也
長納言の饌をとゝのへ道長卿下膳をとる喜
重盛卿納言ふ立しまふ納言盃をとりてのまん

とする時乃長物とり人まのまをやと呼て紀ふ他
人ふゆつんとゝ出ふ清実ふ有賢ふ来
を時納言のいくとゝ道長ふ膳をとる卿通を饗宴をとる日
と道長ふんで膳ふを他人よゆづるべきやたゝりと
とをとりとてをを免をれど納言うゝ笑おひして
のまれとりへくあれたてうゞ作るる人ふ
なれ家のふなりとゞいひるる長ふおをとけも
のかり糸ごくのたをのふ源川の左府六条ゆふ
ちうゞ氏をまりやでなどつゝ身をせをまて
重敦のををる時も毎下の前のかりへ変も他

人は親のよりごりをうけ
たる家を是非補はれたる
なるにさてはどうばし
ども御ちうにてひそかに
しはらく御

まのとれえてみをよう
僧尋法師つきの
さてはいかにうたうべき
同じのおもてに無数なるにてこれあるもれ
ことはりのよろこびあるべ

あるみめにしくさるれてかりきれ
前のおきけるあとをうつひつけはるる
こうのあれこそやうまはるらん
或人是敷史郎とれりとあるはの
あすのみそといはねとりてこうるにいのが
とあるべとひとれば侍るべん
このおいてくるまるあすのみそ
敷史郎と
みのれとうとやまとまるらん
法性寺殿元三ふ御まの御つはひるよ

ゆくて御硯まゐらせて並ありけるにさうしごあそばさ
せ給ひくまゐらせしとく御口のおとにあてて御どうり
ながうせあひありけれど御心のことねのうへよろしく
しちやうりける御前にて御遊ありけるを御いとゝ
じく御ん侍けれ
高陽院にはくてゐのよし在良朝臣法橋侍読ありて
つきまゐりけるに時くさけ候のませて上達部
後朝臣秀頼なるて侍けるとや
保延三年九月廿三日宝金剛院　仁和寺　仙洞小弓筆ありて
十だんの競ありて御遊ありて並ありけるにれ候ふ舞へん

ホ同年九月廿日比十日比ゆかりの御遊じけるに後寛弐年
ども主上御らんじ候あホ五日も御経おこなひ給ふ仙洞
八幡中よりまゐり笙円実房侍大納言笛宰相中
将なりひら朝臣しくでもあり中将ひきとる朝臣ひちりき
なまへ侍すまろね琵琶右大臣家大納言筆なまへの
ちゝ和琴文西宮拍子なまへのくり双調平調つての
御遊まへにほども平調物反まゐり郢曲の後より
今様神楽朗詠などまゐりくてまつくのちう向
万歳楽うひく殿上人上達部下臈より乱舞撥頭
右大臣などし舞あひける御気しきめでたく侍なる

とあやをゝ後まゝる報をゝて入いとゝ月の鼻ゝ
ありをり又白薔薇ひゝくゝ上巻アゝりゝで舞
をる為下舞ゆくゝ遊させ給ふれどゝくゝ舞ゝ
あゝををりそのゝち和尚の舎わり部をゝ菊ゝ数
ゝ秋とゝ作る桜家大納ゝ席とゝびをりをり
そのゝち勅賞ゆゝ月初ゝ和ゝ還御ゆゝをり
同六年十月十二日白河法皇より童の舞はおゝて
蓋物ををり家ゝ右京のゝくゝゝて作る小包
下をゝゝをゝをゝるゝゝゝれども舞ゝ上ゝ法ゝ
為ゝ人舞ゝ上ゝのゝゝふゝをゝゝゝゝ法ゝる夫

長方ゝ作りをる丸ゝ天氣紙ゝ河ゝゝゝ奏
をゝをゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝれバ家成つゝゝゝゝ舞長ゝ
ゝゝ見ゝゝゝゝゝゝゝゝ
中の院宮長方朝臣ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

仲麻呂法師猶も清八法師ふとゝく糸をあり給れば
遠分とゝかく流の中乳父河へくちとりかゝり
きるに沼の辛崎人のりやうこぶれとる氏
おとりきるゆへ人をあとゝあるゆ
しびつゝれとらめつゝ知ゝど
ちゝのおれるゆいて死ゆ
新知伯法九条の吉政大臣のゆへひゝ軒とお
ゝゝとそゝ作りきる
角の屋に年のこゝゆうゝ山人の
ひゝとみ物ゝそゝゝゝゝゝ

こゝろ
おもひ

平尊（たかの）ハ
なにむらやゆきそにうゑ
ねをかへ　ゆめ〳〵さすがみまし
後撰物　秋のもとつゆあるみとのふるさと
るまつをとけつゝうゑわまそるといふいとぞ
とゝひそれば法師子のいねありといひるゝ
よゝこの方法師子のいゝあくゆみそうつそらを
うりをまくゝみ作る
きのつみ法師
みそらいまそよかりきるうれ

中はつたを長さ四へたの紙にまいてよえんどをり
ゑてびとにうあるべし親子一さうの和と座のまへよ
まれたるをびたゞしくそるれはゝうとてこげうかぶ
けのをいてひとのとをしをりあをうあるたをう
じのゝを通りてわれ一上のとゝびゝふをる
いと興あるべし

文治の比法皇たまはれたる長ふおりをる射法なる
のてをよ泉城(せん)の和(くわ)をあつまて中門左府(へ)業房
やうれたをびとうをりをよりを射三番の左府
入たハ左大臣中山おを入たが別当をのてはゝ

をあるのゝ扈従(こじう)をはうとををとをゝ
ひとへうゝぬをををひとを人ふうをて左府の
車のうをへひとへよまいゝをうをるたをう
ふのゝれやうををれどもわゝらふをれたをびのう
て泉へうをうをひうを一条二位の入道(にうだう)保房(やすふさ)
のゝををて作をる重服をうををい微(びう)をけう
重服ををんありてゆををかゝいゝをさゝく縁(えん)り
作して雑(ぞう)をうをりをゝ府ゆををうて左府をををを
雑(ぞう)調備(ちやうび)ひをりとゝびねををうれ食(しき)をうをびををふ
て足をんをのゝまひをり海ををゝゆをうをゝをりゝ

めでこうりをうしなへるを国をうしなひといふるが如し
是はひろ付る牛をば門をんぜ〜きをり幕下
大将よりはじまりてをの〜きをるひとの人々の
ひがごと多かりけるを聞給ひて
事もなくうちすぎ給ひ事をあらはさ給ぬ
こゝとやうれそれがはやすのへかたぐるが如くを
あつくいかを府をうしなへりさ入御らぐめんがくの
よりやうれうをれぐ申て後御をうし入重敬
あり初献は内宮元あげをあげさせ給ひ二献はおぐ元
あげくはゆ宮へまいらせ給ひ門前物のへ御

牛をぐまのつ〜せうれうをそ
暁行法中人の絆へまかりあるに門を入
うりを聞ぐまろくあれてあらこうをれぐるある
山伏れかそぐらんやあるらん
ゆうをあるひとなりをり
人〜あつまりて風をいるるおすて或人業法の
こを空なりかを云法師をおしてうりをるはゆく
軍道法師よみ侍るる
なにをこれをうをなのるべきあるべ
いさこのうりふうをのあさぐ

法井の入道宰相中将ありける時、橋井の家よりまのりの
ぞりに乗て敵の家をぞ渡りける。侍ども、宰相殿ゆゆしく
まいらせんずるぞ、とて、ぞろぞろと、あまたせうぞく
上臈の侍、独八郎、十七、八ばかりなる、
ひきぞりに宰相中将乗て、あとに、
ぞろぞろ、いつとなく、かうあるもゆらんじて
行くも、行くも、ぞうりをぞうりとぞうりとて、行く
きやうに、行くれうきびせるに、
ふりかけ法師のうめくつぶやくぞ、
ぞうりを、とて、まいらせうとて、行きをれば、

包丁刀をぬきうばりまいりまして、
もるぞんをぞ、ゆくまいらせうをれば、
ぞんの行長、ふりんだに、
げに、今見わたしぐらざるぞ、
ぞ、ゆゆしきとて、独、
八郎、看おし、盗人、
やうさうにて、一度、
宰相中将、この、
頃、法井の、
蔵人、

三歳の後一簡列侯為の原すこれいひろうへ今和
新義人ふる海これていやゆきとうまでよ沉醉よ及ぶ
ひうつよあやみくして祢ぐひ物よ生ようぶ尽といふ
那時これ為知つうまつ生こひ作物あひまい
やといふ康光いとく義満蔚義時とあ出されト
て陪臣とうさ那くこ親縁をすんくまひへ
うこあうまひで拾重もうぶけ伝ぬべしと
いひう義時こ自ふ細のくこ出しあぐこ発
ふへ時ぐ那ぐ祢ぐ生うまつ上のゆくもこく付のぐ
れうやの結ふふ宗貫あけくゆ後ぐられうこふよ

こうこうこうこうまつ上ひこ系こゆの名ふく義
時これいこうこ自こせぬいぐしてあぐ生
伝ふふこうこ新義人ゆ出ふのうこ入ありて義時
こうぐあうこわらびうこうこうぐでうりつここの
うふいふよ康光ぐいこくひう事中のたりんな
こうこすの為まりくを祢ぐふよこうひくうこめ
ゆくうりあれこうぐこのあ紀ふうりてこ義満蔚
まこうくけここつのゆふよひつるくこやうり
関伝ぐこうぐひやこれこいふ言上又義時
ひうこゆ品ゆうぐやこ中くあつくうふぐこれ

きなりぬべしとて法師げん者時がびんをさ
りへなでてをあるまてうりたつの紙おを
はひろうゑで今うへがきくひつるひていあていで
まいりてきこしめすとて法師をれば
ひまに新発人よあひまこ所さあていひまきで
とあひく知ふをり極楽とて北嶽一高宗尉
知行がうつふとへをる紙知行いさど押りて座乃と
ぎされひ年めんがくゆくらでいと面白して居
こんといつをこ鶴まて大腸寛花綱がるを浦が
知行がいふこと紙ゆくわまこ知行ゆ北嶽るまで

いこみとれひのみこそ花綱座紙ぐりてすべりと
て居でりをり花綱いみどくこ作りをるさて三
鶴のうこたつこて作をる蒲座のめんがくゆく
りをりひ後極鶴つひれ法ようにひは琵琶をぬと
こ知きれひへうとの新発人とあこら座紙を
て居る時そのつぬぐこよ浦ふこをあがくうが
きれこといひうをあ鶴をこて事をれば
義経沈巴をこらぶ一鶴ふこ行ゆうを後朋輩
あり巻時新発の酒色の白を極と極鶴ゆびよ
北嶽知行助ををおのくこ鳥ふのうて教献ゆ居て

事ありてふかきりうた所を年ことて侍りし伊那附おこ
しおこなひけりきたはいみじうかきりしのちは又こゑ
て今はうちふえにし
七月七日むしこかしの房中よりしゃうじきそのわかれ
とおもくよめる　法眼　当

いろねまでむ世にはかはられむしこかしの
一房はしらぬあかるらん

雲経は養老法師がりせんの扇をつかうてしぶ扇
らうくこれがうかりやせんはし般若経でとそきこし
一の巻をとりよりそるとてするよ

あめんつるみの文はわらひもしも
こちごの紙よみかくなりぬれば
同法師がまの事の般若と菜の般若にあてりまれば

人はよれこあ経ぞいたかふくめる
らのあんりきは般をこあうしを
ぬれこのりうとよありける

なまよりとんふそつくのめり
びんぐりとなるあやしおりべ
来鴉れ槙紙よみ侍りける

君をけふこ鴉りれかはきあづる

ゆくめぐりとて西海道めぐりとぞ申ける

藤原の前内大臣長兼卿の子息左中将の二位兼子卿の姉さ
きもりに二月の事なりけるに雪ふりあまづ降さ
て二条よりすえらきこそりふきてくひ書れひらぐ
ぢて二条中納言宗家卿の家にてりくつりうんの
ひ書ふりてひとりへとりをれだとれたる花のさ
ふりて出されなりるに花つりうりまれだくうの
の迷ひよ

人をうくるのとらさもあるりまり
明らけ書ふいまのこの中事

よりれなりをりとて二条まりふ長よりふ
同二条家の西方の花をすれどりとまく
するよりゆくり坊城西洞院の蓮のこの花
てとり作りまるよ

老の身よ祈りてとらとのぬりまる
老のちとせのおちやひあまん

能弱大僧正実賢とそこそひとりひ
とりめて後祈りて人あてもらを祈りづ
くと祈りまるに法師とのふ稽古
のまるが僧正の祈りてうれづくとれり

はちらくえてきしきこえてぞくれなくちかうり
てまのおはるころ給ぞくくのぐぜう僧正がこえさ
寅猿おかま持つりつるころへ給くれんに深く
ところうハそやらへとゆつきハしべゆねとあてなる
僧正法興の事なりとそ志すゑんにかうりて
いらひきうしとぞ
石泉(せきせん)法師祐性(ゆふしやう)して後ても別るまそうれかう
すぐをおほくまうけて後をおもふ人のかやくはら
いんとそよめる
あのあとハしてゆのふくまそさらてゆぞ

されがそてまうさむうでめにあよ
聖伝(せうんぞう)房まで失いてたち給おもてゆでまゐる添へ
のそこよりいてこちの夢のそでりくりまゐる給人そま
庵よあさまゐる人のいひける
いてあらぬやいでいあらくえあるに
房まうらはのくつきまゐ
かまいそこれかはぞりそめきん
めぐまくこそつきてまゐれ
別るる道に志ら川よまみ侍る法山のよろこび
とありく杓西の神へつかうそりぬするよ

思ひやる二本の書れ下ちらび
ありてうつんちうぞきつる
三条中納言書に八人ふとられる大食すてで
まちるさるるつをくくいあびてしく肥ふとりて
暮ごとにぬまでうるくせられうち六月の比
医師をよびくくうまれるをいでて腐沢
をづきをいのくぬうふ白く腐れば
医師うちうぬづきてもるいたもに肥満の
ゆへをでいるん良薬もあるさひ大先物の
の中飯を見ごろうりいをとこ三ぜんうきりてうふ

あとへあのうちもゆつぐ飯つけと時ごまのりえ
はあれうちぬをうはまるべーさそうひえれが実
をさあうふこそせあうて医師ふうりふをうある
時の飯ちあうんせんとその医師をよびうり
をれでまてどりまびきるものをちぬにて人多
すだりなるにの飯をうげどにをりてあるのさ
うのをさてあをさうひて人ありぞの物をおに宝
ちうの人銀のををいあをあ三千中ちら
をしてそれもちろのをちはりて来ちういづ
まをもあおびてしやまれあを饗無せんずる粥

やうにて医師いとひろほどにみあるとうひてへうつきよ大坂のうつそ酒二ちくゝ中酒云のまへに云ひこのうりとゝ物よみ飯をゝくもゝ酒とかゝくおへをしゝりあれどひの飯と二ちにたりに口へうにくちゝ酒一二門流一ちふひくだりうくするゆ七八食おりねまでとちりうつるみ飯も鮒のすもみ合しめよりうり医師とれをくくみ飯もうりまりひうんよひくやてみげ物よをふとうや

ある人のりゆよりうにたうひたうりほひくた屠とうんとてちてたるとゝ和へ年寄ゝ屠とうひ一人まうりをれどいうじしてひ屠とうせどとおりひくゝ屠へめとれ物よいそ兄まり物へとうに兄侍れいひられど老ゝる侍この屠をまれようせどそうくいうとゝ兄ゝ兄ゝ屠をうくゝ屠をうくゝ物へうくぞうみを屠

ゆうゝ門屠うんとてうゝあうが

老ゝる物をゝじきづにゝゝ

古今著聞集巻之十八終

古今著聞集巻第十九

草木 第九

草木者有時以昔伊勢諸伊勢冊尊既生木祖句々廼馳次生草野姫於戯春有櫻梅桃李之花秋有紅蘭紫菊之花皆是錦繡之色皓烈之匂也然而昨開今落遅速雖異隨風任露変衰不逢似樂有為可観無常矣

延喜十三年十月十二日内記云作侍臣令彩菊花各十分二裏奉勝芳諸以申時各方領花参入

一裏入自仙花　次男進花立庭中　一裏雅花以右側形二裏栽失補名義人不二人名立中

右兵衛督為家卿下侍所に伺候十番衆方
簾中俳諧選進菊中名所哉西方小遊十二月九日二
条侍従献員柚菊時員物くし柚を射遊
右兵衛督為家卿云侍従献而直参失くし
員信云なつめをあひしらまつりそり書に新玉の
多ふかさなつめの実あり哉と申侍ると
せ事くもげうづくもむ山陰の小野のみちの
書戸此歌のようへ侍ひそふよりてをまた
なさ名まをていあざ花山院大臣の三位
此中納の時法性寺殿摂政すて六番歌つ為兄此
事より左衛門内裏へまつりせ侍ものを侍東関紀
八伝聞あれどもとも此大病をとそ世を会に
いたるまをけをまひそりをのびりひ大病をすぐさを
侍とそ八東関紀此歌をどすぐそその孫つの
まへまそ八事此をぞれをあるさをお孫下とをる
れるちをそり人あ中をそ子細此侍をれば侍の
摂政三位中将をとうやまをまをは侍びを事に員信此ま
をくまづうへ侍へ名まをりれを礼を物へ
ひをを東孫大友つぶをに光侍自分的へとそ作
らををそ文治の中侍ものもちに此をわり員保新玉の

本代より茶のうへよりこれをつくる婦人をあらせ
まをりて又宮の御いとけうとの曜変とひやうハ
らきこうをきびはれ磨まハ名くさ面ぐるまて称と
山より出るまよ仏ろうあれよりて茶山の号ハあり
ゆをる御てとすや
天暦七年十月十八日本上の伝信たんとうとうち家
とのく御菊をまりをとり主上清涼殿東北廊
南北廿三ろふ出御ゆ卿東の簀子より作ゆ云
延喜十三年伊信献菊の日兵衛東宮云
一人作仏ゆ分たん二年今日数人院作茶分

とて東宮ハ大病云源頼朝義師氏頼朝二人を
たんとうと大病云義家頼朝義家頼朝二人
右方とした菊いまざ作かうひ〜げるとこれ源義
ようとこれを流石ふ〜ふるてはおれ東遊ふまのる
渕濱より菊一本代うへて源義人西京六人とてとれ紙
かく仁寿殿代西の御所より出て左清涼殿代
一枝代〜きて東よりの小舎人弓矢をとりて作
渕濱の風流云面ぐなり中ふ卿の霜より菊代枝
とうへさせて東ふ立一貫紙うくと源右菊や
ひうきうきてまのくせばりをれで面びくりの

おもをうゑ海くがどに家畠よりはくきりをれどそれも
所がそうとうあるをるうとうとそれ兎角六月に風流花
よりおとりあるをうまうるひれ露ふうて紙ふうえ立て
立ぬ書つる事たゆめて大臣養一口ふれる
八右花を猩蒜へかうとく物度鉢にうえ人ふ獻物則
中一花可ゐる花瓶作云事弾て仍花ゐず紙まてを附
大臣度をうとく廣方の三卿小將酒をあをれを
且摘員わるどとうとくあんをあるどうとたる事二
地沢をまつるを花わざあるなきでかるぬうとり
ありをれど作よりて員にめよをうり仍花物をぬく

中二の花たうとをあをうち孔雀とをうりて珍重
と養をを事の指作を蒲鳥を小金人摘知伝づつう
まつるをを沢方三位作伝あ遊ぶして拍舞わり
をうを後方方ある祖父方延光卿小伴く
つるの姫くむ和あをめうるををくとりてまりて
山茶の南色よこうす別あ人をりてよ面ををれうり
左方 ちをを姫ゐる為をはれつる紙ハををあづう
をくれくををしてそ久しかりをれ
右方 中川のをむ汀のをくハをうなをを乃
おををとつを花をぬけをそを人をを

を後鳥羽院参とた方源川多左近将曹好家義真
鎌倉師也尾秋吉ぞつくりまつりそる方後切棄
四府生秦兼成を高名つくり海川多後く鎌
くぞんの四人よ当仕しをりたれ者で傷負まひの
まうをぞくりあて他年の海うを取りそる代俵
の作ふよりて餘出とび俵しをりた方百姓多左
平糸左石門糸也俵糸多く鎌くそ又双鬼を
参と貴信りよあえつる俵糸河作の小道り
こうくそ又樂和の常こ図和のひびし代多作て或
八強或八次強代多糸は猪を作どそ俵ど作くは鎌を

なるあまをよりこれをあの南をよの歌の歌を厨子
一柿をとりてくぐんの山第をまうをとりて歌のの
歌をあ琴を弾ず深夫風言葉琵琶を弾じをり清絃
をとりくを郷ゆをの歌をのあ人をみをまいり家
歌に歌をふ面らせをる歌をすかつら市の人潜る
より遊をとりて弾琴しまひをり南の山潜をと
のぼりくを座ふ弾くはくをよ音楽をりて弾琴り
ぐりをり細を御掃歌のまをけを鼎をべをり
よをれをり
南屋根の村上の山村歌を人歌を人歌の縁の縁

色ひ異なるはさそうつしらへらまゝまゐらせてさながらびくれ炎(えん)
ありふ座けるにまれど又わらぬ事なぞらへうたへまゐる代
くれ陽(ご)つひとつ没(?)賞(しやう)せさせ給ふものひくもの宴(えん)を行(おこな)はる
承(やまと)久にある権(?)次郎(?)義郎下られし時も又ゆけいまゐりそへて
造(ざう)内(だい)裏(り)ありし不二の孫の二孫太監(けんもつ)親源光(?)行(ゆき)がか
まう川しらへ給ふほとり出せて参りくうらへくまゐらせて
いづまの時の御事にてはまさかん見はつうかへしを孫も
いく程なくく座けねばいまいわたしたゞ小きなりゝらち
ありしこそいとく
康(こう)保(ほう)三年閏八月十五日作(つく)物所(もどころ)画(ゑ)不あへりとぞ

天(てん)の御時小庭に前(せん)栽(ざい)をうへられけり右大将藤原
朝臣源朝臣(とも あり)中納言朝臣侍臣殿上(?)にて後涼
天(てん)皇(?)ひとつのものとゆへにうつさへて酒(しゆ)饌(せん)給りて
男(をとこ)女(をんな)房に御前(?)小秋に入て侍臣唱(しやう)歌(か)し後絵参
を又言光家秋に花枝小ひとつにくりせなほの和哥を
とりなして御覧まひりて云々侍臣に仰せられてうつる
とり出もて延(のぶ)光(みつ)朝臣ぞ取とりて参りける十五夜(?)の後
前栽に花をぞ御はる源文人(じんぶん)後で侍臣和歌を奉る
光朝臣をもてよめさせてまうしけるに又後絵の興ありて
その後これより禄(ろく)を給りけるとなり

天禄二年八月廿八日紀子内親王野宴ありけるの面々歌詠ませ給ふ番ありけるを萩をぐるまとかくかきて
ものをつゝみて奉りたまへりけるを
もくと或人ぞこの
さとをあれいそのあり所をとりて
さとう人出をもなりたまへりしのみなもしらぬ
さりい宮こやあづさ雅を
ふそうれとやす前和泉守源順朝臣なんありければ

梨壺のあ人ぐ中よりとりとりて八人ぐ
うらあてさゝゝ人ゝそれ先ゝこそ宣あさせ
めとやふりてこそ事といなくて今歌をぐまぐれさ
ぬめるなんわるとそ先ゝうかつらつさあとか
さのあいをけの者ぐらわれさあるたこふひふ
加賀のぜうあちぐのの四道にみわげさせて順朝臣
ふあとうゝせ学生為憲してなれすとうれとうれを
為憲なんあぐ源といべるもあくの事
ふあ源ふなのかうあもこれやうふまぐやとてく
ぬ事ぐやむぐとあくいこ命ものをとうあひいでる

第九ゆうりゑて作ごとのいのひぐらしふんをとりふ
つひをるうぐいすてゑてまつをとそのあどもの
物下ごろ第十を俗判ごくなん

なれとこれひとをとく聖人よ言のとき
いとてう言のむとひとをきをん

伊長清輝

長門捨雪有名

ふるの山ふりの聖人もの師も
言ふ人ふりうれ清ふれ

長門のきて

ふるのとうりの山ふりの聖人言ふ
言ふ人ふりのなくもわれう郎

りうきの郎

萩の言ふ人とく白言ふ人ふ世人
ふれふれうみ行りとさ海

判のことのこりふうごもわ言りふ世くてうふ
をとごめぬかり

宇治殿四条大納言公任いまよ言秋の花いが書
きごれうて海ぜうう勝のひうり春人さてがりて
ゆうてとを秋人菊後をくをとを宇治殿作

まきをれぐ大病云梅のそんうへてまつ
いくびびさとやされくまび梅と梅との梅ふかく
自余の花のさらつぐさたなりふをり大病云過と
なりてつくく梅ぐやとれどおぐ花まのわけがれな
紅梅の数いろとてまぐてとやされを優
ふぐ作るに花よくてり
寛元元年十二月廿二百眼湯会れさて紅梅
梅爰ひぐきてれ爰よりてまをれ爰と
どもおりてちく梅いてあをりいと奥ある事と
ひしいかやまわらこちほりけてくぐ先ても

うてまきるちりたはかざりわるまの和いうて梅
事をなれよや
永兼六年六月六日関東ゝ葛蒲の根合をり
ひとと吉ん二月海日塩能れよ毛ひとり梅をり
爰上人お紙先りく吉れ物負ありをり又歌合を
をりを物負なれふりて葛蒲の根紙わくをて
物負を変せまをるくに製米永兼元年十月
六の合の儀のごとく中文四宮殿ふれさるをせ
関大臣野家民ゝ梅家ふ大病云信ふ小野文
中病云兼れさりんのとを塩出信中病云信長

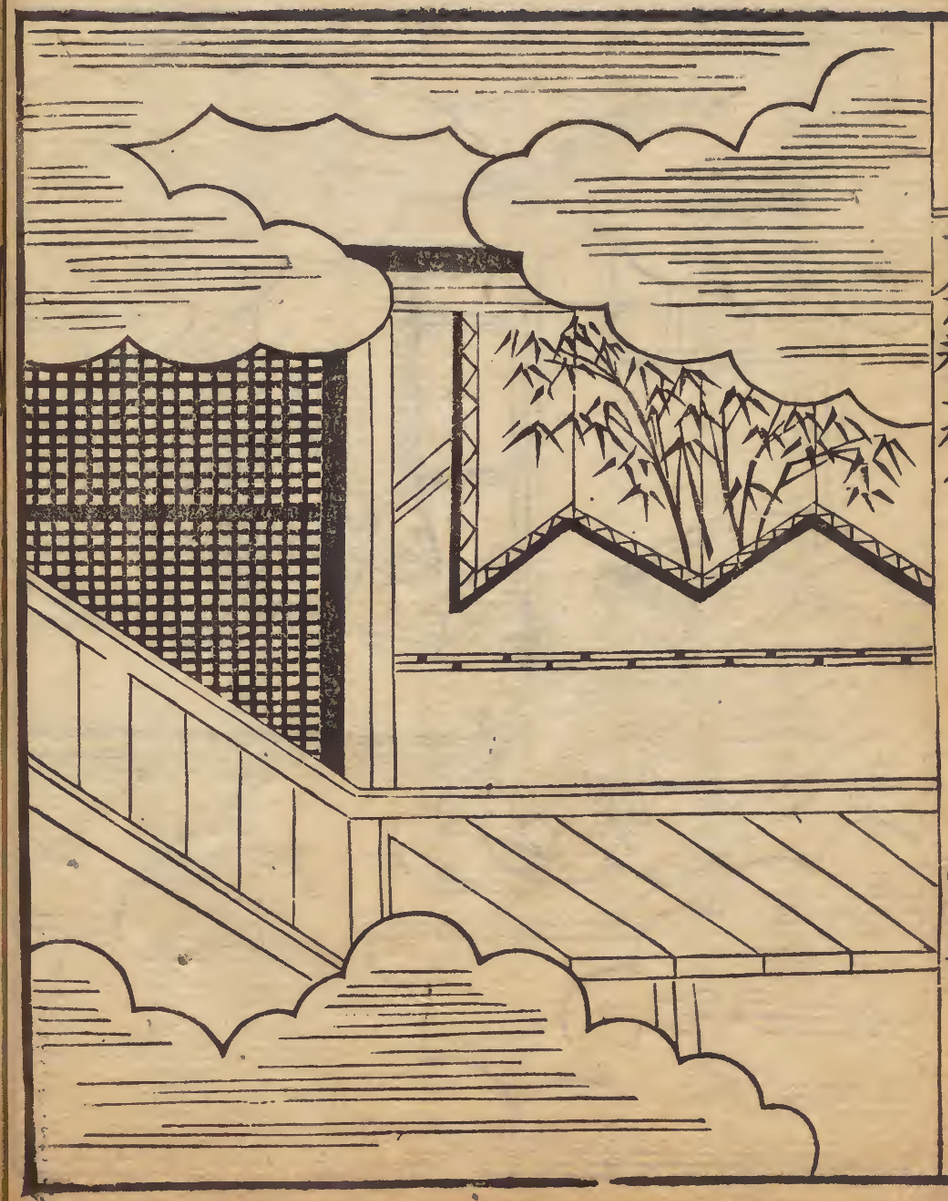
二条中納言信家卿、文武弾琴ハ中将信房ニ伝ル、お将信家卿ハ
人多ク知ル、くまいりまゐはるよわぶと侍
ど、後花園ハ基を門弟ニ人なりをり南乃
ひとりの産れ家のるよ通の書ようきを川測濱
とつくりてもろうひれ知ら人ハ書ぶき霧を
もとうり沉香とをして岩石と作りたてりをあいぶ
り弾のやりの弾ずして手をあるよ机を立くそのうへよ
書一巻ハ、くを像眼をして紙して文紙を摸して
をのく知らの書をうく当ろうひれの筋くを義紙と

ふて敬文あをくみぶりく寛眼を抽をして当ろうひ
をひとをんをををんをようら当ひりはをき家のうす
りの弾をて源の文よ助ぶをを根文筋をををして
知のとををき測のををりふををりうどをれ測ぬうへ
ふをををりみ業ぶみ流をりて測のうへふをを方
の人く家のをんれをふ作つぶをすをれをを風
をを川郷人を弾りをて文基れひぶふをを石をを
小知をうをを菖蒲をつりくをすをれ物を
源よ文郷人方の文基をり作川方ニ戸ぶりある
をうを人よ大敷だいをを敷をを川をのまを

小蝶軍の童六人とつくりてそこに根のとよものく
わかのとくこころをはをそこてつくれり又軍をのぐに根
とをうてとをうあれをあるかをく軍をこれ金根のて作く
きり方の人あれをものあるよ作をはよ算判をあをを
こ門義人一人これ代りこて又碁のあれりたをく
をこうあるよ作碁のてのをつくりて作をうくくうすう
のあることを後作よりて云をうりて左右をを
れくこのこれおりて海おの算子を取て手をいくり
て産ふつく四方に筆形に伝をに碁師に像をに
こを顕乃弁碁盤打とを衣歌乃中将資綱打とをみく

又碁れ下よ作をとひ月をよ左右のうぐ一れ童をのく
人をかよ作ぐんの童二人碁盤の子悪くこれ成
とよ作をりの弁碁盤打と良碁打とを乃中将
資綱打と碁盤打とを百乃弁碁盤打とをあひをつくはよ
作に碁盤打をぐ紀根代和て碁盤打よぐて
南のひをりのぐおりむをくれでをを長みりを
わくをふをの根天をを人をの根天二人をして右衛門
作右をををを海をりりを海ふりて揚よ宝あり
きをり三番代張りしてをを先をきねをよ和をの
貫ををむれを碁師碁盤打と方打と碁師碁盤打と右の

藤原隆俊卿と藤原資綱卿と判者にまいりて
歌合菖蒲郭公早苗恋絃のゝ歌よみ侍りて
ぞれ〳〵中の座よりつゝしよ義経の出仕を
めしの琴琵琶笛篳篥隆俊唱歌資仲卿と調子
宣房卿と笛篳篥のうち関白殿御事ゝ申しかゝりて出仕
て出座の下ゝ出てゝ申ゝ上れつゝえを
とゝ申ゝ侍りて後拾遺の事仕せゝ御づゝの関
白殿御作る大臣御後ゝ座よりつゝて安居
とゝ申ゝ侍りしよ御後とゝ申ゝ



あく退出と爰なる人の孫にあたりをるとやう
經信卿お宰相の時八月十五夜の月
ながめお出遣田澤のつきあり
なりて鏡のごとくあるに天とれ月あきらか
なるひかり見物をそなへおつめてあちこち
ふきまはせとなりて月よりひかり出をもとゞく
陛殿をうしなひてんぞ命して天あけぬまを
うれしがりかの歌を世にうたふ
堀川院の時八月百江神菖蒲をあてまつりし
ことをるゆへなり

進上　水追菖蒲

千年五月五日　大江為武

あのゆをあらそいでそこひ
きれた雅もきん成ぎる人をりきるに御新に成
ゆの弼のおとそこふこひ為ぐあんじえてみ作きる

進上　水追菖蒲

ちとせのさつきいつかあへせん　大江為武

千年　五月

和保二年八月廿八日上皇高野御ふ前栽合
ありきり菖蒲の方人をとりこれりに為上人義
人彩家は侍男は和泉中納

云基宗とたのの〳〵寧和中将宗通に
仕たのたとしはのこの三人為上十家人おとりなり
南でんの寝殿のすれ南面の西方なり
りこあその奥ありまびに大義ちんぐ義たるわ
ひとりこの方は作じものり大臣中文書に
方のさふ梅ゆきてに作ゆりて黄産はりれる
方人たちんのくこ三寅義中納云基宗　注中納言匡房
たちんのくこ俊実　治ひに通俊　寧和中将宗通　乳母衣
大あい鳥帽子出家　まびたの人〳〵集りて郁芳
とたりくその作ゆりて風流并はすこの

具ハさぐ名ゝ多をり御多炉基おなど再藥ゆて炉
れさゝをを人ありをりせんさいゆをり徒我ゝ不名
二人ゝ名く清のあゆこれをく遠長徒ゝ毋をを
をゝゝゝゝりゝれををてりぐりありをり面上人
方人以下これ布衣へをり沼ゆ方代りゝをと花并
掌郷ゆ遠ゝ志く何刹をうりをり豊外の具
ハ方の人ハ知ゝくこれりをるゆや頗めんがく
らぐ付をるやくひゝくゝて炉基と面上の古位
して立さをりをりを陰せんさいゆなりびつを張
ぐをのくあゝこれうゝきをりをゝ面れうゝ

まををゆひくせんさいをうゝりをゝ名ものく
萩女郎花薄菊をぐ代をりをりこれ外今月の和歌
れ部へとぐ方和歌を奥ゆきる月を焼れへ
ゆ歌をり代ゝりをゝ方ゝれるのれうすゆれ半ゝう
をり面上郎源明西ハ扇ゆぐ半ゝりをる陰方の
方信女郎ゆよりてゆ代ゝて出ゆよ面をりを
後鳥羽をめをを家ゆ右徒倫ゝ名の面上人
清をゝをあゝ綱千ゆひてをのくゆ代鎌ぐり
一面鎌ぜゝりく月方方ゆを藥ゆへく二義あり
ゝりをりを藥ゆを代付ゝりゆのあゝ方よ

ゆきていと長くなりこんや作にしてたちたる
和歌ちんぶ法ふたち方侍よをりへ退出とたち方
れはおふ作じて和歌部じを侍こそ中花
よんへしり
長治二年嫁二月廿日わかりの法門の女房為上人
せうく義経人作りをるふ廿よ一枝ばかりをまさ
ち天氣あるをれた日ちれくをまざりをりをうへん
みをして法の日たんをまりをして如成合をきをりたち方
れへく梅の枝をおりてをのん侍の海ようへあへく女房
をえらびくをして糸をり備後ゆ有貴殿ゆ指ゆをて

梅人ばかりひをり義経をもつけ侍をりはをと白ゆの
出ゆをうゆうへく侍をを為ゆををり方花
ををりをれば上達をゆんへをつりをきをり間濃よ
しをりて糸をりを嫁海産ゆををつを地勅宣
ををて人へつりをまりをり為花紙りをへり
和通二年四月上有弟中梅物桃季為花宴て書乃
ををればくゆをり延喜九年八月ゆを物をりを作り
をるとやをのあびへ義柚柳ををををりをり
聖代ゆひをりをいり水瑞ふり侍をん
六月の法会法上人熊野へ参をるをの為ゆあやあ

すべかりけるこゝろをなんとてよみはべりける

ものもいはでなげきわびてあるに

あるこゝろをなんとそいはべりける

義元の年号月代間裏大炊殿あて月花をそへて添

仲納言下義人所へ参るに大炊殿門おりて対面

うんうんなえ〳〵せわる衣冠の人来たりて衣笠殿へ

物こゝろえ来たりあやとゝ見侍まべきこゝろへゝ

こゝろえわるのひとゝ物衣をそる侍人ゞ多り

えんゆんと見をるよ次泉中将宣房朝臣こゝろ

今昔物語集 巻十九

今はむかしよりあやしくえうなるに南面の母屋
にてものの前なる八重櫻のあやしきまでいとうつくしう
のうちにもあるにあるにあるに枝ばかりさきてあるその枝を
侍とおぼしき法師とおぼしき僧とおぼしき俗の
袍の袖にてあるをりにこのみかどの御ことにて
優なる女房のいとうつくしきをひらはしてぞりをと
てつぼねにせんとてさしをるをみてそばにさうして
ものをいひかけるをみれば女房俯者紅
のうすものにて書てつくりたる
なれたるものにぞあるべかめる八重さくら

うりさんやうとしてをせり

五月

爾とわくと君よつくるみきや
爾へさくさをあれげをそらふ

順德院殿嵯十月れころ伝宣和宮殿に大義に為長素
内してものく鬼の間まて爾まやくうれ物くうして
さうしひろあへ清たあくり蔭結をる枝のふくり
さくをる檀紙をもくてくの紙一えぐ
へくあへくてまのくせくて吉東の間伝よりをくく
出され為りをれば宮殿へくり立くゆげよ寄り

為をへに結紙作りてをりをくとなんいと奥ふくへ
ぐんの結ぐぐくやうすへ宮殿にゆげをまるも
けぐ（順德院ト傍書ス）ぐくやうんゆくくを
同御所門裏にて花あくををくくめくく風流
とかぐくく花をくる鶯人者付たる桜の枝
付あこへくてかをて南面に池のくふやり立くり
をる前と付くく大花と書くりくり山事に者道ぐた
うへくれ鼻のあやくを加よりて花の作をを鼻が
あくとぐくをくあれふりて大花と前と付くり
をり結奥のくをあくを作くり

えりえんやうとれしをせ
ず

あるとわくと者よつてうるみをや
あへさくさをあれりげをそろふ

頃座流時十月れころ伝長寿れ宝家に大義に為長素
内してものく鬼の間まして座まやくうれ物くうして
さうしひうろ和へ浦ゆあうり前結をうる板のつうり
をくをを結めしうる檀紙ををくをくの紙一えうざ
へくあへよくてまのくせうをて与果の内伝よりうをく
出されありをれど宮あへいうり立くゆげよ寄り

為もへ結所作りてをりをうとなんいと奥をうへ
くでんの結ゆうづくをうすへし宮家にゆげうをるも
りづ者くやうわうんゆうくうれ

同浦付門書をて者あくをををうくめんくう風流
とやどゆうく者をきうれ彫義人者付をうう係の校
所あを人してかをて南座れ池のをくふやり立をうり
を浦前と付くく大花と書をうりり山事に者道ゆた
うへうれ鼻のあわをを加よりて作をを鼻が
あうをでををうあれふりて大をを前を付をう
をり浦奥のををあをを作をう

泰定元年六月百人の絆へ菖蒲をたゝるに中
ゝみ作りをする

ワヒなくそわやあれかちなんぐん
ちあさるんそやいいてとて

後醍醐院の御時弘安二年九月十日例幣の次中
務宣旨奉行以下職事ばかりまいりて出御まします行
人く是の間ふとりわまり居て何とかさ物語し
きるに大盤所の内侍どもけうねの房さとしをう
ワるこの人共貴所ふたうびひる殿人なりびゆて
うちもとりあくさあくこの物語いひうたなお物語

仙基盤所のおつがれかえで出来あるてひりえで
ふとりをうちられたる所をいひうを
弘氏の中ねがくいづまの方ふりうんとて物を入上
うれど人くもとる同氏付て入をるに殿人永綱ら
もあつどもの役よそひをあとやうりをる公中
ねがえ実出ねと侍殿の役れ居ねまく同をあるよりる
ばけてどぐ成くんてひ法の色行の事もんくうち
いづる人いりうをあてあるる優ふひ物うをとてうち光
あるに人くうれの真して婚礼うんうをり同てに
えあつどのひ出るを又少をうひるをいて優ふで物

をる古今新り

おもひ枝にて本の葉れ色つくる

あしたそ秋れそ先なり事を

やをりをれそくつくめるをなるべし

二月時鳥の綾の織ふ鞠のかるとに柳家

をきりを月成実のすきれあるは鳥すれとひ結をを

いとおりひんをうすをすれをとびくはひの

桃の木よりてぎりくあやくめりをるなどに

一あるを柳くに実白毒より柳をめをれりをり二月を

とに他所よりをきをうをるれめをれどはつをを

ひりくに蛍を付うをれどすをやうにひをく

いづをめてををうをくりて糸づをういひを

をばはつひのそのまひりをを柳のうち二年を

かりて糸をうかすのをとひにあひひを婚

てぎり鶯ハはりをうをくはりをるにそれ木

一年毒ふうををうをるど二年おどをかれをを

をれよ年木よ今年年おりをうも同れよをるあど

はうあををうくを友木をうをばうをあるめやちく濁

那年の柳をを年他所へをりくをるにをひ

室不柳のをゆくをれうをるをぞ

建長元年二月前大政大臣家より行幸ありて遣
関東まで仰せらるるところ一枝梅花さかりなるを
先々人々にその梅のまふしをびけさせ給ふ
由を申す

なを雪ふかくふるにそめぬる梅のえを
ゆきふかくふるあをやぎのえを

ある年和歌の作法うけ給はる梅をあまたさうへ
わかり蓬萌新春白河のむもれぬるをたづね今
月よまるる作法といざなひ給ひぬ今ひとたびかぶり給ふ
うゆとて元のんさりあふまじたりをれば

よみつらねける

うゆとふるはいらとなの梅のきて
ちるまれりをいそけとそ有ふ

西行法師とすすめ給ふ

金光院よりつくみあてく梅をうゆとて給りしに
ひとひ付給ふ

たのしあうりそうゆる八重さくら
ちるとて世代のまれあへとて

松樹と真木といふ所にくんのあふの
まれ貞あるにはあらぬ事れをげきあを

とあらそあびいろをみどりなれどこれを貞心にて
ぬるる貞松八年のさひさにわくこれを長八西乃
あやうさふんぬる潘安仁あたが西征賦ようけれと
あのこと後なり
蓑笠を宰府ふかぬ名をたれ
こらかばあひてこそよ梅のしる
あるかとて春すれて
やとうみちさ後ひくうぐいすはいでくはようり
まひくのちうれ紅梅毎の梅れ片えさ梅り
ひとひ後ひく

ぬるさうのおれ梅のふせうちは
いうにひとりのこと後ふまり
やとまがあさせ後ひうきれどうの木
先久於故宅　廢籬於久年
麋鹿於住所　無主又有花
ぬくやありきるそあさ陶さもあくれとも
あ後をあとでもあうる

古今著聞集巻之十九終

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan